

# L. フロリディ情報圏倫理の正当な評価のために\*

細川雄一郎

## 1 はじめに

本稿は、L. フロリディの理論的情報倫理の内実をある程度紹介し、その仕事を正当に評価するためにどのような準備と視点が必要かを提示する。そこでまず彼の「情報圏 (infosphere)」の概念の概要を述べ、それをめぐる議論状況に簡単に触れる (第 2, 3 節)。次にオブジェクト指向プログラミング (OOP) モデルと呼ばれる、彼が与えた倫理的な作用 (moral action) のモデルの構成要素とその間の関係を解説し、なぜそれがオブジェクト指向 (object-oriented) と呼ばれるのかについて説明を与える (第 4, 5 節)。最後に、倫理的な作用の OOP モデルに普遍的に課されるとフロリディが考える 4 つの基本倫理法則と、その適用例を見る (第 6 節)。

## 2 情報圏倫理

近年の情報の哲学と理論的情報倫理の前衛的推進者として、L. フロリディがいる。彼は、現代の情報社会において、対象がその中で意味づけられ、評価される文脈となるべき最も適切な抽象度をもつ、と彼が想定する環境概念のことを、「情報圏 (infosphere)」と呼んだ。この情報圏では、「何らかの情報をもつもの」、伝統論理学の表現を使えば、「矛盾を含まないもの」、これらはすべて等しく「情報対象 (information object)」と呼ばれ、そうしたいかなる情報対象も、それ自体として尊重 (respect) に値する最低限の内的価値 (minimal intrinsic value) をもつ、とされる。従って、そこで単なる「道具的価値」をこえて、自体的・内的に「道徳的価値」を付与されるのは、人間だけでなく、動物や生命だけでなく、コンピューターやそこに内蔵されたデータ、プログラム自体、そしてそれ

---

\* この論稿は 2019 年 4 月に首都大学東京で行われた首都大学哲学研究会での著者の発表をまとめたものである。

らを典型とする人工物（その先端的な代表例は人工知能やロボットだろう）、さらにはあらゆる自然物にまで拡張されうる。現在「情報倫理」の名で呼ばれる言説は多岐にわたるため、ここでは上のようなフロリディの情報倫理のことを、特に「情報圏倫理（ethics in infosphere）」と呼んでおくことにしよう。

### 3 情報圏倫理をめぐる議論状況

このように紹介すると、彼の情報圏倫理は、真面目な人文学の世界像とは到底思われず、もしかすると生理的な拒絶反応まで引き起こすものかもしれない。実際、不謹慎な言い方をすれば、ここには既にして興味深い仕方で不幸な議論状況が生まれている。というのも、フロリディに先んじて既に理論的情報倫理の分野で世界的な地位を築いている C. カプーロ、その影響の下にある研究者から、フロリディの情報圏倫理に対する強い批判が一方的に向けられているのである。そしてこうした批判は、いきなり上述のような紹介をされれば多くの人が立ち上げてしまうだろうと容易に予想できる理解、その一つの典型に基づいている。当のカプーロ自身の言説にそれが端的に現れている例をいくつか挙げておこう。

The “infosphere”, as Luciano Floridi calls it, is characterized by the “information” of points and numbers in the electromagnetic medium. ([1], p. 181.)

[...] I believe that it is a basic goal of an ontological foundation of information ethics to deconstruct the idea of the infosphere as an autonomous sphere, independent of the phenomenal world of embodied human agents taking care of each other, and built as a society of pure rational digital agents, a kind of parody of the angelic world. ([1], p. 182.)

How far do traditional cultures and their moral values communicate and transform themselves under the impact of the digital infosphere in general and of the internet in particular? ([1], p. 183.)

We should not restrict information ethics to questions of the infosphere. ([1], p. 183.)

## 4 情報圏における倫理的作用（moral action）のモデル—— オブジェクト指向プログラミング（OOP）モデル

もちろん、情報圏とは、カプーロが想像するような概念では全くない。それを見るには、以下のフロリディによって与えられた情報圏における倫理的作用（moral action）のモデル、その7つの構成要素のリストを一つ一つ理解し、それらの間の関係を把握すれば十分である。ここで、情報圏そのものが、それ以外の全ての構成要素たちを取り巻く環境概念として、このリストの6番目の構成要素となっていることに注意しよう。

- (i) a = moral agent
- (ii) p = moral patient
- (iii) M = moral action, constructed as an interactive information process
- (iv) shell = a's personal world of information
- (v) factual information = information about the moral situation
- (vi) infosphere = the general environment
- (vii) envelope = the moral situation

以下、各項目について簡単に説明する。

(i) の「倫理的エージェント（moral agent）」は、何らかの情報対象——これは伝統論理的には単に「矛盾を含まないもの」であったことを思い出そう——に何らかの影響を与える情報対象であれば、何でもよい。ここで、ある倫理的エージェントの影響を被る側の対象には、その倫理的エージェント自身も含まれる。これはつまり、倫理的エージェントは、同時に、自身の（この次に導入される2項目目の）「倫理的ペイシエント（moral patient）」でもありうる、ということである。

(ii) の倫理的ペイシエントとは、(i) から既に予想がつくように、何らかの情報対象から、何らかの影響を受けうるものであれば、何でもよい。

さて、実はこの時点で既に、情報圏倫理の核にある二つのポイントが背景にあることを言っておかねばならないだろう。それはつまり、第一に、(1) この倫理的作用のモデル、情

報圏倫理の舞台の主演——価値の中心、価値の源泉——は、徹頭徹尾、(i) の倫理的エージェントではなく、(ii) の倫理的ペイシエントの方である、ということである。先走って言うてしまえば、これは、あのカントの「他者を目的として」ということの、情報対象一般に対する拡張である（ただしモデル上、情報圏で「他者」にあたる倫理的ペイシエントには自己自身も含まれることに注意）。

そして第二に、(2) 倫理的エージェントと倫理的ペイシエントとなりうるものは、何でもよい、というのは、何かの誇張でも何でもなく、本当に何でもよい、ということである。それは、パソコン画面上のウィンドウのボタンやスクロールバー、メアリーという名の女性、株券、建築物、チェスのポーン（将棋の歩）、虚構的キャラクター、等々でありうる。そして同時にここには、おそらく情報圏倫理の成功の最大の鍵となるであろう、「抽象の階層（the level of abstraction, LoA）」という概念が背景に控えている。このLoAは、前提となる情報分析（informational analysis） $i$ と相対的に与えられ、この前提される情報分析 $i$ を明示する場合、 $LoA^i$ と表記される。端的に言えば、これらの倫理的エージェントと倫理的ペイシエントたち、より一般にその候補となる情報対象たちは、どの $LoA^i$ に属すると見なされるかに応じて分析され、その倫理的な価値を評価される。例えばメアリーは、彼女が属すると見なされるこの抽象の階層が上がるのに応じて、女性としても、人間としても、動物としても、生命としても、物質としても、倫理的に評価されうる。

そしてここでも先走って言うてしまえば、「抽象の階層」というアイデア自体がまた、二つの関連する意味において哲学の伝統的問題に他ならない、と考えられる。まず、最近になって首都大の浅野将秀氏がロッチェの概念の抽象に関する概念論において指摘しているように、「抽象（abstraction）」というプロセスは、従来考えられているよりも遥かに高度で複雑な動的構造を有している、という考えが復興されつつある（特に、それは単なる「共通性の抽出とそれ以外の性質の消去」ではない）。さらに、筆者の考えでは、この「情報対象の抽象の階層」とは、これも首都大の岡本賢吾氏のいう「万物の完全性（perfection）の階層」という、古来からの考えに相当するものと思われる。そして興味深いのは、岡本氏がさらにこれを現代的に「創発（emergence）の階層」と理解できることを指摘している点である（ここで「創発」とは、岡本氏によれば「それ以前の諸事物の単純な複合によっては直ちには作り出せないと思われるものの出現」といったほどの意味である）。浅野氏と岡本氏のこれら二つの指摘は、相互に関連し合って、フロリディ情報圏倫理の問題と限界を乗り越える重要な鍵となるだろうことを、のちに示唆する（6.3節）。

残りの項目の説明に戻ろう。

(iii) は「メッセージ (message)」と呼ばれ、これは上の定義項にある通り、情報対象同士が及ぼし合う倫理的作用 (moral action)、つまり情報対象たちの中で相互にやりとりされる現実的なプロセス (process)、のことである。これを通じて、倫理的エージェントは倫理的ペイシエントに影響を与え、その影響に応じて、倫理的ペイシエントは様々な応答 (respond)・反応 (reaction) を返す (この応答・反応の局面で、倫理的ペイシエントは同時に倫理的エージェントにもなることに注意)。先回りして言えば、このメッセージたちだけが、情報圏倫理の中で二重のカテゴリーを有する。すなわち、メッセージたちは、「情報対象」のカテゴリーに属すると同時に、「プロセス」のカテゴリーにも属する。この意味はのちに明らかになるが (6.2 節)、先に結論だけ言えば、「情報対象」の内在的価値はその定義上「0」を下回らないが、「プロセス」の内在的価値だけが「0」を下回りうる、ということである。これが意味するのは、つまり、メッセージたちだけが、「プロセス」として、「悪 (evil)」——フロリディはこれを「情報エントロピー」と呼ぶ (以下第 6 節参照) ——と評価されうる、ということである。

(iv) の「シェル (shell)」は、一言でいえば、倫理的エージェント固有のいわゆる「内的世界」「主観的世界」のことであるが、ここでは、人間の場合に、そのシェルを構成するものを具体的に挙げたほうが理解しやすいだろう。それはすなわち、人間の場合、当人の倫理的価値観、偏見、趣味趣向、感情的傾向、教育による倫理的信念、過去の行動パターンや態度、過去の倫理的経験の記憶、等々である。これは 6 項目目の情報圏そのものの中で特別に扱われるべきその重要な部分領域であり、従って「主観的情報圏 (subjective infosphere)」とも呼ばれる。このシェルはとりわけ前項目 (iii) に本質的な影響を与えるという意味で重要であることは言うまでもないだろう。

もう一つ、(iii) に決定的な影響を与えるのが、(v) の「事実的情報 (factual information)」である。これは文字通り、問題となる状況に関して倫理的エージェントが有する「正しい情報」のことである。この正しい情報がどれだけ与えられているかに相対的に、倫理的エージェントはその倫理的な評価を受ける。この項目の導入は、多くの伝統的な倫理学説において、完全な無知の状態では倫理的評価そのものがなされないことを考えれば、理解できるものだろう。

(vi) の「情報圏 (infosphere)」は、今まさにその理解を目指しているところのものであるが、ここまででほとんど明らかになりつつあるように、これはこの (vi) 以外の全ての項目からなる全体、特に倫理的ペイシエントを取り囲む、全ての情報対象とそれらの間の

関係からなる包括的環境、と考えるよい。

最後の項目である (vii) 「限界域 (envelope)」は、(iv) のシェルと同じく、(vi) の情報圏の特別な部分領域である。この用語はロボット工学の「作業限界域 (work(ing) envelope)」から来ているが、そこでその語があるロボットが作用を及ぼすことのできる特定の空間的領域のことを指すのと類比的に、ここで「限界域」はある倫理的エージェントがその倫理的作用を及ぼすことのできる特定の倫理的状況を意味している。

## 5 なぜ「オブジェクト指向 (object-oriented)」なのか？

さて、以上の7項目からなる倫理的作用のモデルを、フロリディは倫理的作用の「オブジェクト指向プログラミング (OOP) モデル」と呼ぶ。歴史的に、ソフトウェア工学における OOP 以前の標準的プログラミング手法では、「動作」を定義するコード (処理手続き) と「状態」を表現するデータ (情報資源) が区別され、前者が後者を操作する仕方それぞれが別々に記述・設計されていたが、それに対して OOP とは、この双方を区別せず、ひとまとめにオブジェクト (object) として取り扱うプログラミング方式一般のことを広く指す用語である。

これに対応して、フロリディの OOP モデルは、特に二つの意味で OOP のこの考え方を踏襲している。一つは、(1) 倫理的エージェント／ペイシェントは一般に、その状態や属性といった静的なデータ構造だけでなく、それが実行できる操作・関数 (計算)・手続き (プロシージャ)・方法 (メソッド) といった動的なコード情報 (人間の場合なら可能な行為・技術・行動原理など) をもセットにした複合体として扱われる、ということである。もう一つは、(2) これら倫理的エージェント／ペイシェントだけでなく、それ以外のリスト中の全ての5項目 (iii)~(vii) もまた、全てそのような「情報対象」として扱われうる、ということである。これは特に (iv) (vi) (vii) もまた情報対象として扱われうることを考えれば判る通り、このモデルには「メタ的情報対象」が無数に現れうる、ということであり、それに応じて、そこに情報対象の階層構造が生じる、ということである (古典的な集合論の言い回しでは、クラスもまた対象として扱われ、そこにクラスの階層構造が生じる、ということに対応する)。

ここで、フロリディ自身が少なくとも [4] では明言していない、なぜ彼が OOP の (1) (2) のような性格に注目したのかについて、あくまで現段階の筆者の推測にすぎないが、私見を述べておく (注意: 以下の情報はウィキペディアに基づくものであり、今後より信頼できる文献、例えば [5] に基づいて、裏付けを取る必要がある)。興味深いことに、元

来のソフトウェア工学における OOP の導入は、従来の「コードの為のデータ」とは逆に「データの為のコード」という考えに転換することによって、解決の難しいソフトウェア・バグの改善をもたらしたとされる。おそらくここには、フロリディ自身のこの経緯についての知見が背景にあり、なぜここでもあのカント的「他者を目的として」と似た転換が計算システムの挙動に改善をもたらしたのかについて、単なるメタファー以上の何かがあるのだろうと思われる。

この何かについてもう少し手がかりとなる情報を集めてみると、まず (1) によって、コード情報をオブジェクト化することにより、データ構造に悪影響を与えたコード（バグの原因）の所在が容易に特定できるようになった、という経緯がある（悪の発見、特定）。さらにその上で、データ構造に悪影響を与えるコードの適用を禁止して、オブジェクト自身のコード情報の中に、「カプセル化 (encapsulation)」「データ隠蔽 (data hiding)」というデータ構造を守る機能を、備え付けることができた、という経緯がある（悪に対する抵抗、防衛）。次に (2) の情報構造の階層構造によって、一般に A 階層から成る親オブジェクトから派生した子オブジェクトは A+B 階層として構成され、これが「継承 (inheritance)」と呼ばれて、複数の情報構造体の中にまたがるデータの特定・同定を向上させた、という経緯がある。この「継承 (inheritance)」の概念は、後で見るように、ある情報対象がどんな重要な属性や機能を失っても、その内在的価値、それに対する倫理エージェントの側からの「尊重 (respect)」「気遣い (caring)」は消失しない、という、フロリディ情報圏倫理の最重要テーゼに寄与する概念装置となる (6.3 節)。

いずれにせよ、フロリディがこの OOP という概念の生成史から情報圏倫理の中に最終的に抽出したと考えられる、最も重要な洞察は次である。

一般に、ペイシエント（作用の受信側）こそが、エージェント（作用の送信側）に対する「要求 (claim)」と「制約 (constraint)」を生み出す源泉である。そしてこの要求と制約は、同時にそのまま、エージェントがどのように振る舞うべきかについての、「手引き、導き (guidance)」でもある。<sup>\*1</sup>

この時点で、実は表題にある本稿の第一の目的は達成されているだろう。つまり、フロリディ情報圏倫理の正当な評価のためには、真っ当な哲学者・倫理学者の側で、少なくとも

---

<sup>\*1</sup> ここで筆者が個人的に感得する情報圏倫理の興味は、このペイシエント（作用の受信側）の概念には、例えば特定の職業そのもの、競技そのもの、芸術・学術そのもの、が含まれる、ということである。これは、いかにして自身の身体や生命ですらも、他者の身体や生命のためということ以外のために、自身の選択によって乗り越えられて（フロリディの言い方では over-ride されて）しまうということが可能であるのか、またそれが時に全く不合理なことではなく、多くの人々の心を打つことさえあるのか、ということについて、説明の指針を与えていると思われる。

もソフトウェア工学において OOP が成功を収めた真の理由と、それに関連して哲学的・倫理的に重要と思われる概念について、フロリディと同等かそれ以上の努力をもって、その内実を把握し、その重要性を認め、それを精査・分析する必要がある、ということが示唆できただろう、ということである。それ抜きでは、情報圏倫理を批判することも、無視することも、一笑に付すことも、また逆に、安易にそのままの形で受け入れることもできないだろうと思われる。また実際、そもそも哲学者・倫理学者がソフトウェア、プログラム、コンピューターそのものについての仕組と原理、概念を少なくともある程度把握することなしに、一般に情報の哲学、情報倫理について自信をもって何かを言うこともできないだろう。

## 6 OOP モデルにおける 4 つの基本倫理法則とその適用例

さて、以上の倫理的作用の OOP モデルに普遍的に課されるとフロリディが考える 4 つの基本倫理法則は次である。このリストの下に進めば進むほど、その法則が守られることの倫理的価値は高くなる。

- I information entropy ought not to be caused in the infosphere
- II information entropy ought to be prevented in the infosphere
- III information entropy ought to be removed from the infosphere
- IV the infosphere ought to be protected, extended, improved, enriched and enhanced

ここで、「情報エントロピー (information entropy)」とは、その名から察せられる通り、熱力学のエントロピーの概念をフロリディが自身の情報圏の文脈に転用したものである。より正確には、歴史的にはまず情報理論の父であるシャノンが、フォン・ノイマンの勧めに応じ、自身の理論の中で定義された「情報量」の概念（これは「事象の不確かさ (uncertainty)」を尺度とする）を、熱力学のエントロピー（これは「系の乱雑さ (disorder)」を尺度とする）との共通性から、それと同じ名で「エントロピー」と呼んだが、このシャノンの「エントロピー」をさらに拡張的に、情報圏の文脈で別の意味に転用したのが、フロリディのここでの「情報エントロピー」である。

しかしここでその経緯はあまり関係なく、重要なのは結局、この「情報エントロピー」がフロリディにおいて詰まるところ何を意味するかである。この概念が再びあらぬ憶測や誤解を招く元になっているのだが、簡単に言ってこれは、様々な意味での「情報対象の破壊」である。ここでの「破壊 (destruction)」は、存在、量、内容、質、価値、秩序、構

造、形、パターン、統一性、固有性、といった様々な文脈と観点の下での破壊を含む。そこで、我々としては、この「破壊 (destruction)」に含まれるより具体的な下位クラス概念を列挙しつつ、まずこの語の大まかなイメージを作っておくのがよいであろう。つまりそれは、与えられた文脈と観点に応じて、問題となる対象に対し、矛盾、不整合、不可能、不在、欠如、消滅、喪失、不安定、脆弱さ、貧困、混乱、乱雑、無秩序、汚染、荒廃、衰退、崩壊、漏洩、虚偽、隠蔽、…、このような類のネガティブな事態一般をもたらし、増大させることである、と考えておいてよい。

本稿では、最後に以下、OOP モデルにおけるこの4つの基本倫理法則の適用事例を見ることによって、読者に情報圏倫理の射程と問題を各自検討してもらうことを望む。

## 6.1 UNESCO

これは、情報圏倫理のアクチュアリティをより感じさせる、フロリディ自身が言及しているその比較的慎ましい直観的事例である。というのも、UNESCO の現実的活動は、言うまでもなく有形・無形の文化遺産をシリアスな保護の対象としている。それらはほとんどの場合、生命を有するカテゴリーのものでさえないはずなのに、単なる道具的な価値以上のものを我々の多くがそこに感じ、UNESCO の活動に我々の多くが、ほとんど本能的にと言ってよいほど、当然のように賛同するように思われる。この文脈での情報圏倫理の適用は、とりわけ例えば、なぜ我々が（我が国ではアイヌ語をはじめとする）消滅危機言語を守らなければならないか、その理論的根拠を与えうると思われる。

## 6.2 ナチズム

C. カプーロの影響下にあると思われる C. Fuchs は、フロリディ情報圏倫理に次のような批判を向けている。<sup>\*2</sup>

---

<sup>\*2</sup> 彼はまたこの後の箇所でカプーロ以上の過激な批判をフロリディに向けている。

It is important to see how such approaches [=putting non-human beings onto the same moral level with humans, as both deep ecology and Floridi do] to decentring human morality are linked to strategies of exploitation in capitalism that reify human life: both treat human bodies and minds like things . Nazi ideology is an extreme form of reification. Strategies of exploitation in capitalism reify human beings: they treat their bodies and minds like things. The Nazis ideologically justified killing Jews by comparing them to parasites, which put humans on the same ethical level with animals . Anti-humanism is one of the first logical steps to fascism. Practical and ethical anti-fascism argues for the specificity and difference of the human being in relation to non-humans. ([6])

Destroying Nazism with violent and political means increases political entropy in order to enable a society that is not based on a project of extermination. Anti-fascist resistance is therefore in Floridi's terms the increase of political entropy. [...] Floridi's ethics cannot grasp these complexities. His ontology fails to provide an ethical imperative that can challenge Nazism and fascism. ([6])

これは、全ての情報対象が最低限の内在的価値をもつ、というフロリディのいう「ミニマリスト価値論 (minimalist axiology)」をそれだけ聞けば、誰にも思い浮かぶ懸念だろう。これに対して、フロリディの言い分は、OOP モデル (第 4 節) の項目 (iii) 「メッセージ (message)」の説明で注意した通り、以下のようなものだろう。

つまり、ナチズムは OOP モデルではメッセージという特殊なカテゴリーに分類され、それは「情報対象」のカテゴリーに属すると同時に、「プロセス」のカテゴリーにも属する。従ってその価値は、「情報対象」としては 0 (フロリディの定義では 0 は矛盾と同等) を下回ることはないが、「プロセス」としてはまさに「情報エントロピー」の人類史的典型となり、0 を (おそらく人類史上最大に) 下回る。(いわば “情報エントロピーを憎んで情報対象を憎まず”。またここで、ナチズムが「情報対象」としては 0 を下回ることはない、というのは、筆者による一つの解釈の提案にすぎないが、例えばそれは「思想」あるいはそれが確かに存在した/するという「事実」としては、「人間に内在する悪の標本・証拠」として、あるいはまた、それに対抗するために「悪の戦略」を知る、という意味で、情報価値をもつ、と考えることもできるだろう。)

それゆえ、情報対象としてではなく、破壊的プロセスすなわち情報エントロピーとしてのナチズムには、特にフロリディの基本倫理法則 III が適用される。このときフロリディは、破壊的プロセス=情報エントロピーに立ち向かう防衛的・生産的プロセスそれ自体は、破壊的プロセス=情報エントロピーではない、と宣言することができるだろう。

### 6.3 メアリー

フロリディは情報対象のミニマリスト価値論の必要性を説く中で、生まれつき脳をもたず生まれてきたメアリーという仮想の女性を例にする。ここには、現代の人文学が避けて通れない最も切実なテーマが象徴されているだろう。それは例えば、不可逆な脳死状態にある人々、そして彼らから移植された臓器たちの、「実存」の問題のことである。この例を挙げるときフロリディの根底にある問いは、彼らの「実存」が、もはや従来の倫理的価

値判断の枠組み——それが理性的人間中心主義を超えた、生命中心主義の内部でも、生態系中心主義の内部であっても——では、決して十分に説明し尽くすことはできない、という倫理的直観にあると思われる。その意味で、彼の情報圏倫理の真のアクチュアリティ、真の切実な射程は、実の所この「実存的価値」の再構成、ということにある、という可能性もまた、我々は彼の学説を評価する上で視野に入れておくべきであろう（逆にいうと、そうでないとすれば、彼の学説の興味は、そうである場合よりもずっと差し引かれることになるだろう、ということである）。

さていま、ある情報分析の下での抽象の階層構造において、LIVING ORGANISM を祖先オブジェクト (the ancestor object)、PERSON をその子孫オブジェクト (the descendant object) とする。フロリディによれば、このときメアリーは PERSON の階層においてのみ実現される「自由 (freedom)」という性質——このようなそれ以前の祖先オブジェクトには発現せず、ある子孫オブジェクトの階層で発現 (創発) する新しい性質のことを、「局所的属性 (local attribute)」と呼ぶ——を剥奪されている。しかし彼女は、それでも、「感覚がある (sentient)」という、祖先オブジェクト LIVING ORGANISM において発現 (創発) し、そこから「継承 (inherit)」された性質——これを「継承的属性 (inherited attribute)」と呼ぶ——を担っている。この「感覚がある」という継承的属性の担い手であるために、メアリーは依然として他のあらゆる倫理的エージェントから「尊重 (respect)」と「気遣い (caring)」を受けるべき情報対象であり続ける。

しかしここにもまた、誰にもすぐ思い付く懸念がある。それは、このように一見その内在的価値を見出すのが難しい情報対象について、その価値を何とかして「豊かな」階層から「貧しい」階層へむしろ「下って」見つけ出そうとする努力は、例えば sentient よりも (sentient +) freedom の属性の方が絶対的に価値が高い、LIVING ORGANISM よりも (LIVING ORGANISM +) PERSON の階層の方が絶対的に価値が高い、という像を、ほとんど自動的に作り出してしまわないか、ということである。つまり、「抽象の階層」は、とりわけこれをそのような像をもったまま「完全性の階層」「創発の階層」と言い換えればなおさら、これはそのまま情報対象たちの「カスタム制度」のことなのではないか、ということである。

あるいは、まさしく現実の宇宙は厳しく、実際そうであり、現実の意思決定や政策決定の際にも、それに基づく的確な優先順位の判断が必要なのだ、ということもあるいは可能かもしれない。しかし、筆者にはやはりそれは多様な人間的事実を照らして整合的ではない、と思われる。というのも、例えば我々の記憶に新しいあの相模原障害者施設殺傷事件があった一方で、次のような事実は決して無視できないと思われるからである。つまり、その犯人や彼への同調者とは全く逆に、現在も過去においても、何らかのハンディキャッ

プを背負った人たち、彼らのために自らの命よりも彼らの命を優先することが可能な／可能であった人間たちが確かに存在し、そしておそらく、人間の歴史の中で事実そのように生きた人間たちもいただろうことは、まず間違いないと思われるからである。

そして、そのようなことはいかにして可能なのか、と問うことの方が、素朴な哲学的な問いとしても遥かに興味深いと思われる。そこでもちろん全くの見通しにすぎないが、最後にこの問題を少しだけ考えてみたい。前に述べた通り（第4節参照）、この手がかりは、首都大の浅野氏と岡本氏の二人の指摘を合わせた所にあると考えられる。

まず、一方で、浅野氏の指摘の重要なポイントは、抽象された性質には、実は常に隠伏的に、その性質が実現された実現プロセスが付随する、ということにあると思われる<sup>\*3</sup>。これは、フロリディの理論において、「継承的属性」だけでなく、いわばその「継承プロセス (inheritance process)」もまた問題にされなければならないことを示唆するだろう（その場合、メアリーは究極的には、メアリーである限りにおいて LIVING ORGANISM である、と言える）。そしてこの継承プロセスは、継承的属性の間におけるような単純な優劣の比較可能性を、もはや許さないとと思われる。この「継承プロセス」は、おそらくその本性からして固有なのであり、またおそらくブラックボックスの部分をつねに残しうらだろう。従ってその場合、情報対象たちは、彼らのもつ諸性質の「継承プロセス」において、それらの間の比較評価をつねに乗り越える可能性をもつ、と言いうらだろう。

次に、他方で、岡本氏の「抽象の階層／完全性の階層」を現代的に「創発の階層」として読み換える視点は、情報対象の新たな価値の次元を生み出しうらと思われる。それは、情報対象それ自体の中に何かは既に創発しているか否か、ではなく、情報対象が何かの創発に寄与しているか、また寄与しうるか、という観点を我々に与えてくれる。これは情報対象をその「道具的価値」によって見ることは異なる。たとえば筆者が考えているのは、次のような陳腐なストーリーである。脳をもたず生まれてきたメアリーの母親は、なぜかそれでも、彼女の娘に愛情を注ぐ、ということが十分考えられよう。彼女は、メアリーを見守るにつれ、メアリーが彼女の生きる意味そのものになっていることに気付く。このとき、このような人間的事態そのものもまた、情報圏では（メタ的）情報対象でありうらことを思い出そう。メアリーは、そのとき、自らに内在する「継承プロセス」の固有性によって、決して道具的ではなく、固有に、かけがえのないものとして、この新たな情報対象の「創発」に寄与している、——とは言えないだろうか。

---

<sup>\*3</sup> この指摘はまた、この抽象的性質の実現プロセスを考えることによって、なぜ抽象的性質に様々な規則性・法則性があるのか、その理由と根拠を、その実現プロセスの制約 (constraint) の中に見出すことの可能性も示唆している。

## 6.4 プライバシー

このフロリディの例は、筆者が純粹に、上の基本倫理法則の面白い適用の仕方であると感じたので、最後に取り上げておく。ある夫婦がいて、その夫が妻の日記を許可なく読んだとしよう。そしてそこにはただ妻の夫に対する日々の愛情が綴られていたとしよう。フロリディによれば、夫はそれでも、不正な行為をしたことになる。なぜだろうか？ フロリディによれば、妻の情報は彼女の存在を構成する一部としてある。つまり、妻の情報は本来、その情報の源泉である妻そのものと、完全な一体性（integrity）をもっている。夫はその一体性を、妻の情報を彼女の許可なく見た、というまさにその事実によって、傷付けたわけである。なぜなら彼は、彼が彼女の日記を知覚し読み取ったことによって、その情報の源泉である妻の管理と統制を超えた場所に、つまり彼の脳の内部に、彼女の存在の一部を、勝手に複製し、保存したからである。その行為は、夫の妻というかけがえのない情報対象の存在に対する、まさに尊重（respect）の欠如を表現している。

## 参考文献

- [1] R. Capurro. Towards an ontological foundation of information ethics. *Ethics and Information Technology* **8**(4), 175-186, 2006.
- [2] R. Capurro. On Floridi's metaphysical foundation of information ecology. *Ethics and Information Technology* **10**(2 – 3), 167-173, 2008.
- [3] L. Floridi. Information ethics: on the philosophical foundations of computer ethics. *Ethics and Information Technology* **1**, 37-56, 1999.
- [4] L. Floridi. On the intrinsic value of information objects and the infosphere. *Ethics and Information Technology* **4**, 287-304, 2002.
- [5] M. Gabbrielli, and S. Martini. *Programming Languages: Principles and Paradigms*. Springer, 2010.
- [6] C. Fuchs. *Information Ethics in the Age of Digital Labour and the Surveillance-Industrial Complex*. Springer, 2016.